



他者との関係調整志向と規範選好

谷, 芳恵

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(2):9-14

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003899>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003899>



他者との関係調整志向と規範選好

Orientation toward relationship adjustment with others and the preference of norms

谷 芳恵*
 Yoshie TANI*

要約: 本研究では人並み志向とユニークネス欲求をもとに、他者との関係調整志向を類似性・差異性志向の2次元から捉え、これらの関係調整志向の特徴について検討した。一般大学生に質問紙を実施し、147名から回答を得た。ユニークネス欲求を制御変数とする人並み志向、人並み志向を制御変数とするユニークネス欲求と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求、3次元自己制御規範との偏相関係数を算出した。その結果、人並み志向と拒否回避欲求、ユニークネス欲求と賞賛獲得欲求、拒否回避欲求に有意な正の関連がみられ、2つの関係調整志向は相互に区別される志向であると考えられた。また人並み志向は社会価値認識、社会価値認識と正の関連、個人価値認識と有意な負の関連を、ユニークネス欲求は社会規範遵守、個人価値認識、個人規範遵守と正の関連を示し、人並み志向とユニークネス欲求は共に集団規範と有意な関連はみられなかった。これらの結果から、両関係調整志向が社会、集団、個人の規範選好にどのように関連するのか考察を行った。

キーワード: 他者との関係調整志向, 規範選好, 人並み志向, ユニークネス欲求

問題と目的

これまで文化心理学などの立場から、日本人は相互依存的で調和と関係性を重視する傾向があり、その傾向がパーソナリティ特性や精神的健康、道徳観など様々な心理のプロセスに影響していることが多く指摘されてきた(木内, 1995, 1996; 北山, 1994; 北山・唐澤, 1995; Markus & Kitayama, 1991; 高田, 1999; 高田・松本, 1995)。このような社会では、独立した個人として振る舞うよりも、集団の構成員として振る舞うことが志向され、人並みであることが一定の価値を持つと考えられる。例えば人並みであることの近似概念に、ふつつであることがあげられるが、大橋・山口(2005)は「ふつつの人」に対する印象について検討し、「ふつつの人」は「ふつつでない人」よりも好意的に評価されることを示している。このように、「ふつつ」は日本人にとって、物事を判断する上で重要な概念であり(大橋・山口, 2005)、他者から良くも悪くも突出しない「人並みであること」は、日本社会で生きる上で、必要とされる重要な基準を示すものと考えられる(元橋, 1993)。

このような人並みであることに対する志向性については、これまで相互協調的自己観や集団主義、社会志向性、同調行動などの領域において多く述べられてきた。しかし近年、ふつつさに対する印象

やふつつさが精神的健康にもたらす影響など、ふつつであることそのものについての心理的効果を捉えようとする研究が散見されるようになっており(大橋, 2008; Ohashi & Yamaguchi, 2004; 大橋・山口, 2005; 佐野・黒石, 2005, 2009; 黒石・佐野, 2007)、人並みであることやふつつであることに対する研究的関心の高まりがうかがえる。

その一方で、他者にあわせて振る舞う集団埋没的な日本人の特性は、個性や独立性の乏しさを表すもののだとして、個性を伸ばす、独創性を育てるといった教育指針が打ち出されて久しい。このような他者とは異なる独自の存在としての自己を志向する特性に関連して、ユニークネス欲求についての研究が進められてきている。Snyder & Fromkin (1980)は、人間は本来的に他者とは違うユニークな存在でいたいという欲求を持つとするユニークネス欲求理論を提唱している。

以上の、他者と同じでありたい欲求と他者とは違う存在でありたい欲求は、相対する心理のようにみえる。本研究では、これらの欲求が人々の社会行動とどのような関連を持つのかを検討する。

人並みであることとユニークであることに関する概念定義

ここで、「人並みであること」「ユニークであること」は、心理学的研究においてどのように捉えられてきたのかについて概観する。

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程

(2011年9月30日 受付)
 (2012年1月16日 受理)

まず、ふつうであることについては、「多くの他者と同じで変わっていないこと」(黒石・佐野, 2007; 佐野・黒石, 2005), 「ユニークではない」(大橋, 2008), 「周囲の他者と共有された基準」(佐野・黒石, 2009)などと定義されている。また、人並みであること、ふつうであることを志向する心理については、元橋(1993)により検討されている。元橋(1993)は、「みんなと一緒に」「人並み」を求める心理をめぐる先行研究を概観し、人並みの暮らし方・生き方をしたいと望む生活姿勢・信条としての志向と、能力評価や報酬の与え方や結果を平準化しようとする志向の、2つの文脈から捉えている。前者は人並み志向、後者は平準化志向と呼ばれるが、本研究でとりあげる他者と同じでありたい欲求は、この人並み志向に相当する。この人並み志向は、「平凡なふつうの生き方に満足していて、わが道をゆくという姿勢には欠けた心的・行動的構え」と定義されている。

これに対してユニークネス欲求は、「自尊感情を高めるようなポジティブな側面における他者との差異の認識に対する欲求」(山岡, 1993)と定義される。ユニークネス欲求理論を提唱した Snyder & Fromkin (1980)は、類似性を独自性の剥奪と捉え、他者との過剰な類似性の認知がユニークネス欲求の高まりを引き起こすとしている。

以上のように、人並みであること、ユニークであることは、他者との差異性の欠如、他者との価値観の共有、類似などの観点から捉えられており、人並み志向とユニークネス欲求は、単一直線上の対極にある志向として捉えられているといえる。しかし、人並みでありたい欲求とユニークでありたい欲求は経験的には必ずしも対立するものではなく、これらの一見矛盾する志向は相互に関連しあいながら機能していると考えられる。これらはともに自己と他者との差異性を認識することによって生じる反応性であり、その類似性と差異性のいずれに重点をおき、どのような社会的関係を築いていこうとするかの志向の違いであると考えられる。本研究では、この志向を他者との関係調整志向と呼ぶ。関係調整志向の違いに関連する要因として、本研究では賞賛獲得欲求・拒否回避欲求に注目する。

関係調整志向と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連

人々は自分の行動に対し、他者から何らかの評価を受ける。この際、人は基本的に、他者から肯定的な評価を獲得し、否定的な評価を避けようとするが、肯定的な評価を得ようとするのか、否定的な評価を避けようとするのか、その評価的目標の内容によって、行動コントロールの方向性が規定されると考えられる(小島・太田・菅原, 2003)。このような評価的目標の違いに注目し、他者から賞賛され好かれたい欲求(賞賛獲得欲求)と他者から嘲笑されたり拒否されたりしたくない欲求(拒否回避欲求)を測定する尺度が菅原(1986)、小島ら(2003)によって作成されている。この2つの目標は、公的自意識の高い人にみられる、周囲から孤立しないような振る舞いと自己顕示的な振る舞いという、一見矛盾した行動を媒介するとされる(菅原, 1986)。これは、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は社会的承認を得るための異なる方向性を示しており、他者と同じように振る舞うのか、独立的に振る舞うのか、即ち人並みであることとユニークであることのいずれを志向するのかに関連していることを示唆している。本研究では、2つの関係調整志向と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連を検討し、これらの関係調整志向が持つ特徴を捉えることで、それぞれ区別される志向であるといえるのかを明らかにすることを第一の目的とする。

関係調整志向と規範選好の関連

他者との類似性、差異性の志向である関係調整志向は、所属する社会や集団の一員としての自分と、独立した個人としての自分の、いずれを重視するかに関わり、どのように自分を呈示するか決定に影響すると考えられる。即ち関係調整志向は、自分が何を望ましいと考えるのか、所属する社会や集団において何が望ましいとされるのかなどの様々な次元の規範の中から、いずれの規範を重視するかを選好を左右し、その規範に従って行動すると予測される。山岡(2009)は、このような個人の行動を制御する規範を社会・集団・個人の3次元から捉え、これらの各次元の規範が相補的に機能しあってその時々行動が選択されるとしている。社会規範とは、自分が生活する社会の規則や価値観を取り込んだ規範であり、法律、常識、マナーなどがそれにあたる。また、集団規範とは所属集団の価値観、合意、目標や評価基準を取り込んだ規範であり、個人規範は個人的な価値観や志向、理想像などを反映した規範である。それぞれの規範を自己評価のよりどころとする価値認識傾向とその規範を遵守し逸脱を回避しようとする規範遵守傾向から、その時々行動は選択される。ユニークネス欲求と3次元自己制御規範との関連については、山岡(2009)においても検討されているが、そこでは、ユニークネス欲求の高低による自己制御規範の差、および両変数の相関係数が検討され、ユニークネス欲求が高いほど、個人価値認識、個人規範遵守、集団価値認識が高いことが示されている。しかし、人並み志向との関連については検討されておらず、その関連の違いについてはまだ明確にされていない。このことから、人並み志向、ユニークネス欲求と3次元自己制御規範との関連を検討し、関係調整志向がいずれの規範の選好傾向に関わるのかを明らかにすることを第二の目的とする。

仮説

以上をふまえ、本研究では、以下の4つの仮説について検討する。

1. 人並み志向は、拒否回避欲求と正の関連、賞賛獲得欲求と負の関連を持つ。

人並み志向が高い人は、よくも悪くも他者から突出することを望まない。そのため、他者からのネガティブな評価だけではなく、ポジティブな評価をも回避しようとする傾向を持つと考えられる。

2. ユニークネス欲求は、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求と正の関連を持つ。

ユニークネス欲求が高い人は、ポジティブな側面での他者との差異を求める傾向が高いために自己顕示的であり、他者から高い評価を得ようとする。その一方で、ネガティブな評価を避けることで自尊心を高めようとする傾向を持つと予測される。

3. 人並み志向は、社会規範、集団規範と正の関連を持ち、特に集団規範との関連が強く見られる。個人規範とは負の関連を持つ。

人並み志向が高い人は、周囲の他者に同調し、他者と同じように振る舞おうとする傾向が高いと考えられる。そのため、所属集団、社会における基準が優先され、個人の価値観は社会や集団の価値観ほど重視されないと予想される。

4. ユニークネス欲求は、個人規範と正の関連を持つ。また、社会規範、集団規範とも弱い正の関連を持つ。

ユニークネス欲求の高い人は、他者との差異の認識を求めるため、個人的基準を重視しそれに従う傾向が強いと考えられる。しかし、

それと同時に他者からのネガティブな評価を受けない程度に社会や集団に従い、適応的に振る舞うことが求められる。そのため、社会規範や集団規範との対立は回避されるべきものであり、これらの規範を遵守しようとすると考えられる。これらを検討することで、人並みであること、ユニークであることを希求する心理の背景に、どのような社会関係を築きその中に自分を位置づけようとする目標があるのか、またそれが行動を左右する価値、規範の取捨選択にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。

方法

調査協力者

国立大学 K 大学の心理学に関する講義を受講している学生に質問紙への協力を依頼した。授業終了後に質問紙の配布・説明を行い、集団で実施した。計 147 名(男性 54 名, 女性 83 名, 不明 10 名)から回答を得た。

調査内容

フェイスシート 学年, 性別, 年齢をたずねた。

人並み志向 元橋(1993)が作成した人並み志向尺度を使用した。8 項目からなる。5 件法(「1: 全くあてはまらない」～「5: 非常にあてはまる」)で回答を求めた。

ユニークネス欲求 山岡(1993)が作成したユニークネス欲求尺度を使用した。24 項目からなる。5 件法(「1: 全くあてはまらない」～「5: 非常にあてはまる」)で回答を求めた。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求 小島他(2003)による。「賞賛獲得欲求」「拒否回避欲求」各 9 項目からなり、計 18 項目。5 件法(「1: 全くあてはまらない」～「5: 非常にあてはまる」)で回答を求めた。

3 次元自己制御規範 山岡(2009)による。社会・集団・個人の 3 次元について、それぞれ「規範価値認識」(8 項目)、「規範遵守」(6 項目)の 2 下位因子があり、計 42 項目である。まず、質問の冒頭に、“私達は、普段の生活の中で、さまざまな判断をしながら過ごしています。つまり私達は、善か悪か、美か醜か、好きか嫌いかわ、かっこいいかわかっこ悪いかなどを判断する基準を持っています。その基準には、①法律のような自分の所属する社会全体に共通する基準 ②特定の世代の人たち、自分の仲間たちといった狭い範囲の人たちにだけ共通する基準 ③自分独自の基準 など、様々なものがあります。ここでは、上記①～③それぞれの価値観や美意識についてお訊ねします。”と教示を与えた。その後、①自分の所属している社会の判断基準 ②自分の所属している仲間集団の判断基準 ③自分自身の判断基準 の順に、それぞれの質問項目に、5 件法(「1: 全くあてはまらない」～「5: 非常にあてはまる」)で回答するよう求めた。

結果

各変数得点の算出

各変数の内的信頼性を確認するため、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、それぞれ「人並み志向」 $\alpha=.74$ 「ユニークネス欲求」 $\alpha=.78$ 、「賞賛獲得欲求」 $\alpha=.81$ 、「拒否回避欲求」 $\alpha=.83$ 、「社会価値認識」 $\alpha=.66$ 、「社会規範遵守」 $\alpha=.72$ 、「集団価値認識」 α

$=.73$ 、「集団規範遵守」 $\alpha=.72$ 、「個人価値認識」 $\alpha=.73$ 、「個人規範遵守」 $\alpha=.79$ であった。社会価値認識の値がやや低かったが、分析に耐えうると判断し、そのまま使用した。それぞれ因子ごとに項目得点の平均値を算出し、各変数得点とした。

なお山岡(1993)によると、ユニークネス欲求尺度は 6 つの下位因子からなるとされているが、その後の研究では 1 因子構造として扱われている(山岡, 1995, 1998, 2009)。そのため、本研究ではこの流れに従い、ユニークネス欲求尺度を 1 因子構造として扱った。

基礎統計

算出した各変数の得点について、全体及び男女別にみた平均値、標準偏差、度数及び性差の検定結果(t 検定)を Table1 に示す。いずれの変数得点も、理論的なニュートラル・ポイントは 3.00 である。ユニークネス欲求、拒否回避欲求、個人規範、個人価値認識、個人規範遵守において平均値が 3.00 よりやや高めであり、人並み志向でやや低い値であった。

また、拒否回避欲求のみで有意な性差がみられ($t=-3.49, p<.01$)、女性は男性よりも他者からのネガティブな評価を避けようとする傾向が高いといえる。

Table1 各変数の全体及び男女別にみた基礎統計と、性差の t 検定

	全体		男		女		t 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
人並み志向	2.77	.57	2.73	.56	2.80	.59	.70
ユニークネス欲求	3.24	.41	3.30	.41	3.21	.40	1.29
賞賛獲得欲求	2.96	.62	2.99	.68	2.93	.59	.53
拒否回避欲求	3.48	.65	3.26	.68	3.63	.59	3.49 **
社会価値認識	3.10	.49	3.11	.44	3.09	.53	.30
社会規範遵守	3.03	.62	3.07	.62	2.99	.63	.76
集団価値認識	3.01	.52	2.98	.52	3.02	.52	.42
集団規範遵守	3.04	.68	2.92	.67	3.10	.69	1.49
個人価値認識	3.46	.57	3.47	.68	3.47	.47	.01
個人規範遵守	3.36	.61	3.26	.67	3.41	.55	1.43

** $p<.01$

各変数間の相関係数の検討

人並み志向、ユニークネス欲求、賞賛獲得・拒否回避欲求、3 次元自己制御規範の相関係数を算出した(Table2)。その結果、有意な相関がみられたのは以下の通りである。

まず、人並み志向とユニークネス欲求には強い負の相関がみられた($r=-.64, p<.001$)。次に人並み志向は、拒否回避欲求($r=.19, p<.05$)、社会価値認識($r=.34, p<.001$)、社会規範遵守($r=.30, p<.001$)、集団価値認識($r=.19, p<.05$)、集団規範遵守($r=.21, p<.05$)と正の相関がみられ、個人価値認識($r=.41, p<.001$)、個人規範遵守($r=.30, p<.001$)と負の相関がみられた。またユニークネス欲求については、賞賛獲得欲求($r=.34, p<.001$)、個人価値認識($r=.42, p<.001$)、個人規範遵守($r=.42, p<.001$)と正の相関がみられ、社会価値認識($r=.19, p<.05$)と負の相関がみられた。

人並み志向、ユニークネス欲求の両者と有意な関連がみられたのは、社会価値認識、個人価値認識、個人規範遵守だけであった。しかし、それ以外の変数についても、概ね人並み志向とユニークネス欲求では各変数で正負反対の関連がみられる傾向があった。この結果をみる限りでは、人並み志向とユニークネス欲求は対極に位置す

Table2 人並み志向, ユニークネス欲求と各変数の相関係数

	人並み志向	ユニークネス欲求
ユニークネス欲求	-.64 ***	
賞賛獲得欲求	-.15	.34 ***
拒否回避欲求	.19 *	.06
社会価値認識	.34 ***	-.19 *
社会規範遵守	.30 ***	-.03
集団価値認識	.19 *	-.15
集団規範遵守	.21 *	-.11
個人価値認識	-.41 ***	.42 ***
個人規範遵守	-.30 ***	.42 ***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

る変数であるとする従来の見方を支持するようにみえる。しかし、人並み志向とユニークネス欲求に強い負の相関があり、以上の関連にはこの負の相関が何らかの影響を与えていることが考えられる。そこで次に、人並み志向とユニークネス欲求を制御変数として、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、3次元自己制御規範との偏相関係数を算出した。

各変数の偏相関係数の検討

ユニークネス欲求を制御した人並み志向、人並み志向を制御したユニークネス欲求と、賞賛獲得・拒否回避欲求、3次元自己制御規範との偏相関係数を Table3 に示した。分析の結果、有意な関連が見られたのは以下の通りである。

まずユニークネス欲求を制御した人並み志向では、拒否回避欲求($r = .28, p < .01$)、社会価値認識($r = .27, p < .01$)、社会規範遵守($r = .34, p < .001$)と正の相関がみられ、個人価値認識($r = .21, p < .05$)とは弱い負の相関がみられた。また人並み志向を制御したユニークネス欲求では、賞賛獲得欲求($r = .29, p < .001$)、拒否回避欲求($r = .24, p < .001$)、社会規範遵守($r = .21, p < .05$)、個人価値認識($r = .23, p < .001$)、個人規範遵守($r = .35, p < .001$)において、それぞれ正の相関がみられた。

Table3 人並み志向, ユニークネス欲求と各変数の偏相関係数

	人並み志向 (ユニークネス欲求)	ユニークネス欲求 (人並み志向)
賞賛獲得欲求	.05	.29 **
拒否回避欲求	.28 **	.24 **
社会価値認識	.27 **	.04
社会規範遵守	.34 ***	.21 *
集団価値認識	.09	-.05
集団規範遵守	.16	.02
個人価値認識	-.21 *	.23 **
個人規範遵守	-.02	.35 ***

注) ()内は制御変数

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

これらの結果を Table2 に算出した相関係数と比較し、その違いを検討すると、まず偏相関ではユニークネス欲求と拒否回避欲求、社会価値認識に正の関連がみられていることがあげられる。また、Table2 では人並み志向と集団規範、集団価値認識、集団規範遵守、個人規範遵守、ユニークネス欲求と社会価値認識、集団規範に有意な相関がみられたが、偏相関ではこれらの関連はみられなかった。さらに個人規範と個人価値認識に注目すると、人並み志向、ユニークネス欲求との偏相関係数は、それぞれの相関係数に比べて非常に

小さくなっていた。人並み志向とユニークネス欲求で正負反対の関連が見られたのは個人規範、個人価値認識のみであり、集団規範については両者とも有意な関連はみられなかった。

考察

他者との関係調整志向の区別性の検討

2つの関係調整志向について、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連を通してみていく。まず、両志向で拒否回避欲求との関連において類似の傾向がみられた。人並み志向とユニークネス欲求はともに拒否回避欲求と正の関連を持ち、他者からのネガティブな評価を避けようとする傾向に関連することがうかがえた。またユニークネス欲求では、賞賛獲得欲求とも正の関連がみられ、ユニークネス欲求が高いほど他者からのポジティブな評価を得たいと望むことが示された。菅原(1986)は、賞賛獲得欲求の強い人は積極的に行動し他者の注目を集めることにより、拒否回避欲求の強い人は個性を殺して周囲との軋轢を最小限にすることによって集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとする旨と指摘しており、今回の結果はユニークネス欲求が高い人はこれらの相対する特徴を併せ持つことを示唆している。即ちユニークネス欲求が高い人は、自分の個性を主張しながらも、それが周囲からネガティブな評価を受けないように、慎重に調整を図っていると考えられる。Snyder & Fromkin (1980)は、ユニークネス欲求とは他者とのポジティブな差異の希求であり、ネガティブな差異を示す逸脱傾向とは区別されるとしているが、この結果はこのユニークネス希求の適応的側面が反映したものと考えられる。以上の結果から、仮説2は支持されたといえる。また、人並み志向は賞賛獲得欲求と負の関連を持つと予測されたが、有意な関連はみられず、仮説1は一部支持されなかった。人並み志向の高い人はネガティブな評価を受けて悪目立ちすることは望まないが、ポジティブな評価までも回避しようとするわけではないといえる。

以上のことから、2つの関係調整志向は他者からのネガティブな評価を回避する評価的目標をともに持っており、他者との類似性・差異性の志向の違いにはポジティブな評価を獲得したいという自己顕示性の個人差が影響していると考えられる。これは、2つの関係調整志向を区別されるものと捉える本研究の見解に一致している。

関係調整志向と規範選好の関連

次に、各関係調整志向と規範選好との関連をみていく。人並み志向は社会価値認識、社会規範遵守と正の関連をもち、人並み志向が高いほど、社会的な価値観や規範を重視し、社会の規範やルールを遵守してそれに反することのないようにしようとする傾向が強いと考えられる。また個人価値認識との間には負の関連がみられたが、個人規範遵守とは有意な関連はみられなかった。これは、人並み志向が高いほど個人的な価値観や基準を重視したり優先したりする傾向は弱い、そのような個人的規範に従った行動が抑制される傾向が高いとはいえないことを示している。しかし、人並み志向と最も強く関連すると考えられた集団規範については、価値認識、規範遵守ともに、予測に反して有意な関連はみられなかった。これは、人並み志向が高い人が優先するのは特定の所属集団にのみ通用する規範ではなく、より一般的な社会で制定される規範であることを示唆している。以上から、仮説3は一部支持されなかった。

集団規範について仮説が支持されなかったことについては、集団規範の選好が関係調整志向の個人差を超えてなされるものであったためと考えることができる。ウチ意識の強い日本社会において、特に青年は同質的な他者への配慮意識が強いとされるが(高田・松本, 1995), そのため一般的他者が構成する社会集団や個人レベルでの価値観、規範の選好とは異なり、所属集団の規範は人並み志向やユニークネス欲求の個人差による影響を受けにくかったのかもしれない。この点に関しては、本研究の結果では推測の域を出ないため、今後の検討課題とする。また今回、集団規範については“特定の世代の人たち、自分の仲間たちといった狭い範囲の人たちにだけ共通する基準”と定義し、“自分の所属している仲間集団の判断基準”を想定して回答するよう指示において求めた。しかし、大学生の所属集団は、サークル、バイト先等、多岐にわたる。そのため、社会規範や個人規範に比べて集団規範の位置づけが難しく、予測された結果が得られなかった可能性もあり、社会規範と集団規範の提示方法については検討が必要だろう。

ユニークネス欲求においては、社会規範遵守、個人価値認識、個人規範遵守と正の関連がみられた。このことから、ユニークネス欲求が高いほど個人規範による自己制御が促進され、自分個人の価値観や判断を重視し、それに従って振る舞おうとする傾向があるといえる。またユニークネス欲求が高いほど社会的な価値観や規範に基づく行動が促進されるという結果は仮説4に一致し、ユニークネス欲求がその社会が持つ価値観と対立するものではないことがうかがえる。しかし、社会価値認識と有意な関連がみられなかったことは、それが表面的な行動のレベルでの規範遵守にはつながるが、本当の意味で社会規範に価値を見出しているとは限らないことを示唆している。なお今回、ユニークネス欲求と社会規範に正の関連がみられ、集団規範とはいずれの関連もみられなかったが、この結果はユニークネス欲求の個人差は集団規範に関連し、社会規範とは関連しないとする山岡(2009)の結果に一致しない。このことから、ユニークネス欲求による自己制御規範の選好への影響については、更なる検討が必要である。

以上の結果から2つの関係調整志向と規範選好の関連を比較すると、両志向の規範選好は社会価値認識と個人価値認識、個人規範遵守に違いが認められる。価値認識傾向についてみると、人並み志向では社会価値認識と個人価値認識が正負反対の関連を示しており、社会規範と個人規範は対立する価値として認識され、個人を殺して社会的な存在として振る舞うことに価値を見出すと考えられる。しかしユニークネス欲求では個人規範のみ価値認識と関連しており、社会規範や集団規範を守ることが自己評価に影響するとはいえないようである。また規範遵守傾向は実際の行動決定に関わり、両関係調整志向の行動面での特徴は社会規範と個人規範において現れると考えられる。社会規範のみに重点が置かれる人並み志向に比べ、ユニークネス欲求は社会規範に沿いながら個人規範も遂行しようとするため、その時々での社会行動の複雑さが生み出されると予測される。しかし、本研究ではこれらの規範選好が行動決定に及ぼす影響については検討しておらず、今後の課題として残される。

まとめ

今回の結果から、人並み志向とユニークネス欲求から捉えた2つの関係調整志向はそれぞれ区別される変数として扱うことが必要

であると示唆された。2つの関係調整志向が相互に異なるものであるとすると、両者のバランスがどのようにとられているのかが問題となる。これらのバランスは常に一定であるとは限らず、判断の内容や状況などによって左右されることが予想される。関係調整志向の高低のバランスによって、規範選好に異なる特徴がみられる可能性もあるが、本研究ではデータ収集数が不十分であったため人並み志向高低群とユニークネス欲求高低群による分析は見送った。今後さらにデータを蓄積し、両志向の交互作用についても検討する必要がある。その上で、関係調整志向がその時々での社会場面における規範の選好にどのように影響し、実際の行動決定に結びついているのかを検討していきたい。

引用文献

- 北山 忍・唐澤真弓(1995). 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, **35**, 133-163.
- 北山 忍(1994). 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, **10**, 153-167.
- 木内亜紀(1995). 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **66**, 100-106.
- 木内亜紀(1996). 独立・相互依存的自己理解—文化的影響, およびパーソナリティ特性との関連— 心理学研究, **67**, 308-313.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介(2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- 黒石憲洋・佐野予理子(2007). 他者が「ふつう」であることの意味：対人認知および対人感情の観点から 国際基督教大学学報. I-A, 教育研究, **49**, 67-78.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 元橋豊秀(1993). 人並み志向と平準化志向 社会心理学研究, **9**, 1-12.
- 大橋 恵(2008). ふつうなら、満足：フィードバックされた成績が心理テストの妥当性評価に与える影響 東京未来大学研究紀要, **1**, 17-25.
- 大橋 恵・山口 勸 (2005). 「ふつうさ」の固有文化心理学的研究：人を形容する語としての「ふつう」の望ましさについて 実験社会心理学研究, **44**, 71-81.
- Ohashi, M. M., & Yamaguchi, S. (2004). Super-Ordinary Bias in Japanese Perception of Future Expectations. *Asian Journal of Social Psychology*, **7**, 169-185.
- 佐野予理子・黒石憲洋(2005). 独自性欲求及び「ふつう」認知が精神的健康に及ぼす影響 国際基督教大学学報. I-A, 教育研究, **47**, 61-66.
- 佐野予理子・黒石憲洋(2009). 日本における「ふつう」の意味—自己改善動機の見点から— 対人社会心理学研究, **9**, 63-71.
- Snyder, C. R., & Fromkin, H. L. (1980). *Uniqueness: The Human Pursuit of Difference*. Plenum.
- 菅原健介(1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研

究, **57**, 134-140.

高田利武(1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, **47**, 480-489.

高田利武・松本芳之(1995). 日本的自己の構造—下位様態と世代差— 心理学研究, **66**, 213-218.

山岡重行(1993). ユニークネス欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究, **9**, 181-194.

山岡重行(1995). 自己確証としてのユニークネス欲求追求行動—ユニークネス欲求研究への新アプローチ— 心理学研究, **66**, 107-115.

山岡重行(1998). ユニークネス欲求の個人差と自己の概念化傾向の検討 立教大学心理学科研究年報, **40**, 73-79.

山岡重行(2009). 3次元自己制御とユニークネス欲求 立教大学心理学研究, **51**, 89-101.

本研究は、日本社会心理学会第51回大会において発表したものである。調査にご協力いただいた学生の皆さんに、心から感謝申し上げます。